

Title	五蓋を捨離するということ
Author(s)	古川, 洋平
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 46 P.49-P.64
Issue Date	2012-12-25
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/27229">http://hdl.handle.net/11094/27229</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 五蓋を捨離するということ

古川 洋平

キーワード：五蓋，修行道，十善業道，預流，如実知見

## はじめに

筆者は数年来、DN 2等に説かれる戒・定・慧の三学の要素からなる修行ルート（以下「修行道」）の研究を行ってきた。その成果の一部は拙稿古川 [2008] に収められているが、本論はそれ以降の研究成果をふまえ、修行道のさらなる理解に寄与することを目的とする。以下、修行道の凡その流れを紹介した上で本論の焦点を示し、検討に入る<sup>1)</sup>。

## 1 修行道と釈尊の成道伝承

まず修行道の構成を確認する。各修行道は説示目的が多様であり、その構成がすべて一致しているわけではない。次項の一覧はニカーヤ中の代表的な修行道の流れを示したものである。

3つの修行道の構成を比較すると、「五蓋の除去」前は修行項目に出入りがあるものの、「五蓋の除去」後は「四禪」を修め「三明」等によって解脱するという構図が共通していることが分かる<sup>2)</sup>。

この「四禪」→「三明」による解脱の構図は、菩薩としての釈尊がブツダとなる様子を伝える釈尊の成道伝承の一種と共通しており（MN 4, 19, 36, 85, 100, AN VIII-XI）、榎本文雄氏、Schmithausen氏、Vetter氏などが両者の位置付けに言及している（榎本 [1982] pp.69-75, Schmithausen [1981] pp.202-222, Vetter [1988] pp.21-32）。釈尊の成道伝承と修行道の先後関係

MN 27	MN 39	DN 2
①発心と出家	①慙愧を具える	①発心と出家
②戒蘊(身口・生活の浄化) (衣鉢の携帯と知足)	②身体による振る舞いの浄化	②パーティモッカによる防護
③感官の防護	③言葉による振る舞いの浄化	③戒蘊(身口・生活の浄化)
④正念正知	④思考による振る舞いの浄化	④感官の防護
⑤五蓋の除去	⑤生活の浄化	⑤正念正知
⑥四禪(心の浄化)	⑥感官の防護	⑥衣鉢の携帯と知足
⑦三明	⑦適切な食事	⑦五蓋の除去(+比喩)
*以下、「」付きのものは修行道における項目をさす。	⑧覚醒の努力	⑧四禪(+比喩)(心の浄化)
	⑨正念正知	⑨知見・意所成身(+比喩)
	⑩五蓋の除去(+比喩)	⑩六神通(+比喩)
	⑪四禪(+比喩)(心の浄化)	
	⑫三明(+比喩)	

表1 ニカーヤにおける代表的な修行道の構成一覧

は初期經典の成立発展に関わる重大な問題であり、軽々に論じることが出来ないが、初期經典を伝承していた出家者達にとっては釈尊の成道は事実であって、修行道には解脱を目指す彼等が釈尊の歩んだ道を追体験していく意味合いもあったと考える。馬場紀寿氏によると、DN 2に説かれる修行道はブッダゴーサによる綱要書 *Vism* の下地となっている(馬場 [2008] pp.94-101)。修行道は釈尊の成道伝承を念頭に置いた、南方分別上座部における修行綱要の骨子と言える。

筆者はこのような修行道の中でも、「四禪」→「三明」に直接結び付けられる「五蓋の除去」に注目した。「五蓋の除去」は先に提示した3つの修行道でも一貫して修められており、多様な前半部分と比較的固定している後半部分の間に位置している。以下、本論ではニカーヤ中の五蓋の用例を渉獵・整理し、<sup>3)</sup>そこから得た成果を修行道の理解に生かしていくこととする。

## 2 五蓋とは何か

五蓋 (pañca nīvaraṇā/-āni) はニカーヤの散文部分で、「心 (citta) の汚れ (upakkilesa) であり智慧 (paññā) の力を弱める (dubbālīkaṇa)」と形容される5つの煩惱の総称である<sup>4)</sup>。どのような共通点や目的の下これらの煩惱がまとめられているのかは明らかではないものの<sup>5)</sup>、ニカーヤでは五蓋が蓋う対象は比丘・遊行者・バラモンなど人間のみに限られている。また、有学 (即ち預流・一來・不還) にとっての五蓋は捨離 (<pra-√hā) されており、無学 (即ち阿羅漢) にとっての五蓋は「捨離され、根扱ぎされたターラ樹 [のように] 根元が断たれ (ucchinamūla)、生存なきものを作る、未来に生じる性質の無いもの」とされ (SN V, pp.327-328)、預流以上の者には五蓋が捨離されているとされる<sup>6)</sup>。

法数に関わる語を順次に列挙していく DN 33, 34は、五蓋の各項目を、第1項目:kāmacchanda (諸欲の対象に対する欲求)<sup>7)</sup>・第2項目:vyāpāda (害意)・第3項目:thīnamiddha (沈鬱と眠気 cf. 阪本 (後藤) [2006])・第4項目:uddhaccakukkucca (浮つきと後悔)<sup>8)</sup>・第5項目:vicikicchā (疑い)と説明している (DN III, p.234, 278)。(第1から第5項目という用語は便宜上筆者が用いている)

註釈は第3項目と第4項目を dvandva の複合語と説明し (Sv p.211)、五蓋とは言うものの実際の項目は7つあるとも言える<sup>9)</sup>。また、註釈箇所によって第3項目中の middha を身体的なものと解釈する場合があります、thīnamiddha が「心の汚れ」と考えられていたのか問題を残す<sup>10)</sup>。

ニカーヤ中の五蓋の用例を収集すると、以上の形式の五蓋が最も多く、論蔵や註釈文献でも同様の項目が用いられている。ただし、ニカーヤには上とは異なる項目の五蓋も見受けられるので、以下、本節では上の形式を一応五蓋の基本形とみなし、基本形とは異なる五蓋に焦点を当てて検討を

加えていく。

## 2-1 悪趣に墮ちない

前節で述べた如く、修行道では釈尊の成道伝承と重なる「四禪」→「三明」の前に「五蓋の除去」が修められ、そこには出家者が人里離れた坐臥処で五蓋を除く様子が描写されている (DN I, p.71, MN I, p.181 etc.)。その際五蓋の第1項目は *kāmacchanda* ではなく *abhijjhā* (欲しがり) であり、第2項目の *vyāpāda* には *padosa* (害心) が加わっている<sup>11)</sup> (第3項目以降は基本形に同じ)。修行道では、このように明らかに先の五蓋の項目と異なるタームを用いながらも、それらを五蓋と総称しているのである。<sup>12)</sup>

それでは何故、同じ五蓋であるにもかかわらず *kāmacchanda* ではなく *abhijjhā* が用いられるのか。確かなことは言えないものの、*abhijjhā* 等の五蓋の例には十善業道/十悪業道と結び付く要素が見出せる。<sup>13)</sup> 例えば MN 8 では、経の主題である「削り取ること」(*sallekha*) の具体例として十善業道・十無学法・「*thīnamiddha* を離れた」(*vigatathīnamiddha*)・「浮ついていない」(*anuddhata*)・「*vicikicchā* を渡った」(*tiṇṇavicikicchā*) が列挙される (MN I, pp.42-44)。ここでは五蓋中の *abhijjhā*, *vyāpāda* を離れていることが十善業道中の意業に関する2項目 (無貪・無瞋恚) と同一視されている<sup>14)</sup>。また、第2項目である *vyāpādapadosa* の用例を調べると、「五蓋の除去」の定型句の例を除き、いずれも十善業道/十悪業道を説く際に用いられている。(SN IV, pp.321-322, pp.342-343, p.351\* (\*ビルマ版の表記に従う))

これに関して AN IV-61 の用例を参照する。本経は、釈尊が在家信者アナータピンディカに対し、世間で望まれる4つのものとして財産・親族・長寿・生天を挙げ、それらの獲得に作用するものとして確信・戒・喜捨・智慧を具えることを説く。釈尊は智慧を具えることを以下のように説明する。

また資産家よ、智慧 (pañña) を具えることとは何でしょうか？ 資産家よ、彼は abhijjhāvisamalobha (欲しがりという不適当な貪欲) によって打ち勝たれた心と共に時を過ごしなが、為すべきでないことをなし、為すべきことを欠かします。彼は為すべきでないことを為しながら、為すべきことを欠きながら、名声と楽から逸脱します。vyāpāda (害意) によって打ち勝たれた心と共に……thīnamiddha (沈鬱と眠気) によって……uddhaccakukkucca (浮つきと後悔) によって……vicikicchā (疑い) によって……逸脱します。資産家よ、そこでその立派な人である弟子は、「abhijjhāvisamalobha は心の汚れである」というように知った後 (viditvā)、abhijjhāvisamalobha を心の汚れとして捨離するのです (<pra-√hā)。[vyāpāda は心の…… (以下4項目は中略) ……捨離するのです。そして資産家よ、「abhijjhāvisamalobha は心の汚れである」というように知った後、心の汚れである abhijjhāvisamalobha は捨離されたものとなり、「vyāpāda は…… (以下4項目は中略) ……捨離されたものとなることから、この立派な人である弟子が大いなる智慧をもつ者、広大な智慧をもつ者、領域の中のものを見る者、智慧を具えた者と言われるのです。資産家よ、これが智慧を具えることと言われるのです。(AN II, pp.66-67)<sup>15)</sup>

本用例は五蓋の捨離を在家信者に説いている点に特徴がある。abhijjhāvisamalobha (欲しがりという不適当な貪欲) はMN 7でも用いられるが、そこでは abhijjhāvisamalobha, vyāpāda を含む 16 項目の心の汚れによって汚されているのかどうかで善趣・悪趣が予期されるとする (MN I, pp.36-37. cf. Ps I, pp.167-168)。また、visamalobha は十悪業道や人間の寿命及び人間達の滅びに関わっている。(DN III, pp.70-74, AN I, pp.159-160)

初期經典において、十善業道/十悪業道は人間の善趣・悪趣への転生に

関して扱われるものであり (cf. 北條 [1981], 平川 [2000] pp.166-180)、人間は各々が三業のそれぞれに配当される10項目について、例えば「欲しがりでない者」(anabhijjhālu) 等である場合には善趣に至り、そうでない場合には悪趣に転生する。対して修行道の場合、出家者は「戒蘊」で殺生等の身口業に関する冒頭7項目をそれぞれ捨離した後に、「五蓋の除去」で意業に関する abhijjhā 等の五蓋 (AN I, p.272-273 etc.) を捨離しており、十善業道で善趣に至る場合と共通している。五蓋を捨離した者である預流者は「(悪趣に) 墮することなき性質をもつ」(avinipātadhamma) とされるから (DN I, p.156 etc. cf. Sv p.313 etc.)、この点で修行道で abhijjhā 等の五蓋を捨離することには、出家者が十善業道の延長線上に立って、悪趣に墮しない者となる点が意図されていたと考えられる。

## 2-2 如実知見の達成

さて、その他の五蓋の用例を調べると、第1項目を kāmārāga (諸欲の対象に対する情欲) とする用例も見出せる (第1項目以外は基本形に同じ)。例えば MN 48 で釈尊は、それらを具えた者が預流果に達するような7項目の第1として、以下のように説く。

また比丘等よ、立派な人の (ariya)、解放に結びつく、それを為した者が正しく苦の滅に導かれるところの見解とは何でしょうか? 比丘等よ、ここに、原野に行き、樹の根元に行き、空き屋に行った比丘は以下のように考察します。「一体私の内面には、その纏わりつくものによって纏わりつかれた心をもつ私が、ありのままに知り、見ることが出来ないような (yathābhūtaṃ na jāneyyaṃ na passeyyaṃ)、その捨離されていない (<pra-√hā) 纏わりつくものがあるのだろうか」と。比丘等よ、もし比丘が kāmārāga (諸欲の対象に対する情欲) によって纏

わりつかれた者となるならば、他ならぬ纏わりつかれた心をもつ者となります。もし比丘がvyāpāda（害意）によって……thīnamiddha（沈鬱と眠気）によって……uddhaccakukkucca（浮つきと後悔）によって……vicikicchā（疑い）によって……他ならぬ纏わりつかれた心をもつ者となります。……（中略）……彼はこのように知ります。「私の内面には、その纏わりつくものによって纏わりつかれた心をもつ私が、ありのままに知り、見ることが出来ないような、その捨離されていない纏わりつくものが無いのだ。私の思考は諸の真実の覚りのためによく向けられている」と。これが彼に達成される、諸の凡夫と共通でない、立派な人の出世間の第1の智なのです。（MN I, p.323）<sup>16)</sup>

引用では、kāmarāga等の五蓋によって阻害されている比丘が、「ありのままに知り、見ることが出来ない」（yathābhūtaṃ na jāneyyaṃ na passeyyaṃ）、つまり如実知見出来ないと説かれている。五蓋によって阻害されている比丘が如実知見出来ない点はこのパターンの五蓋の用例全てに共通し、<sup>17)</sup>五蓋が如実知見を妨げる性格のものであることが強調されていると言える。舟橋一哉氏は如実知見の達成が預流者及びariya（立派な人。cf. 榎本 [2009]）となることを意味すると指摘している（舟橋 [1952] pp.163-183）。舟橋氏の指摘は本論の主張を裏付けるものと言えるが、同時に、五蓋の捨離がariyaとなることも関わっていることも示唆しているので、以下この点について補足的に検討し結びとする。

### 2-3 ariya たること

ニカーヤには出家者・在家者に関わらず、「人間の法を超えた、立派な人に相応しい特殊な知見」（uttarimanussadhammā alamariyañāpadassanavisesa 以下「超人的な知見」）を得るという表現が用いられることがある。この内、



本論と関わる例を列挙すると、①五蓋により蓋われている者が超人的な知見を理解し、見、目の当たりにする根拠は見られない (MN II, p.203, AN III, pp.63-64)、②比丘が超人的な知見を目の当たりにした上で、「四禪」→「三明」を修めている (MN I, pp.440-442)、③在家信者であるチッタ居士が超人的な知見を得ていることの表明として、四禪を修めることを望むほどの境地に達していると述べる (SN IV, pp.300-302) の3例を指摘できる。

この3例から五蓋との関係を推察するに、五蓋は在家者・出家者を問わず、常人よりも優れた者、即ち *ariya* に相応しい者になるにあたって障害となっているものと考えられ (cf. *dasa ariyavāsā* (DN III, p.269))、かつその段階は修行道の「四禪」→「三明」を修める段階にあたりと理解できる。超人的な知見自体は出家者の解脱知見を示すと考えられる場合も多い<sup>18)</sup>。しかし、註釈は上掲の「人間の法を超えた」の中の「人間の法」を十善業道と解釈しており (Ps II, p.21, Spk III, p.101 etc.)<sup>19)</sup> この解釈がニカーヤの伝統に沿ったものであるとすれば、十善業道の延長線上に立っているという点で2-1の検討結果を支持することになる。

## 2-4 小結

以上、主に形式的な側面からニカーヤにおける五蓋の特徴の整理を試みた。五蓋には第1項目を *kāmacchanda* とするものの他に、*abhijjhā* や *kāmarāga* を第1項目とするものがある。*abhijjhā* 等の五蓋には人間の善悪の転生に関わる十善業道/十悪業道との関係を指摘できる一方で、*kāmarāga* 等の五蓋の例では、五蓋が如実知見を阻害しているという側面が強調されている。五蓋を捨離することは預流の段階に至ると共に、*ariya* に相応しい者となることを意味する。五蓋とは、常人の領域と常人以上の領域との間に位置しつつも、在家・出家の違いに関わらない、人間を蓋う煩惱である。

### 3 修行道における五蓋

ここまでの、五蓋が有学にとって捨離 (<pra-√hā) され、無学 (阿羅漢) にとって根絶されている点、在家者にも五蓋の捨離が説かれている点などを指摘し、四向四果や在家・出家の区別に注目しつつ五蓋の特徴を把握してきた。一方で修行道は、発心を起こした在家者が出家して段階的に修行項目を修め、阿羅漢となっていく解脱への道であり (cf. 表1)、在家者が阿羅漢となるまでの道のりを示している。本節では修行道に説かれている「五蓋の除去」について若干検討し、結論としたい。

修行道で出家者は、戒蘊などを具えた上で人里離れた坐臥処に親しみ、托鉢後そこで結跏趺坐する。彼は思念 (sati) を現前させてから、abhijjhā等の五蓋の各項目を捨離した後、それらから心を浄化 (<pari-√śudh) させている (DN I, p.71 etc.)。註釈は五蓋の捨離を沈靜 (vikkhambhana)、浄化を解放 (<pari-√muc) であり、再び取著しないことと解釈しており (Sv I, p.211 etc.)、捨離と浄化を区別している。

このうち捨離については、五蓋を捨離せずして初禪に達することが出来ないとする例や (AN III, p.428)、初禪の達成が五蓋の捨離を含意するという例が見出せるから (MN I, pp.294-295 cf. Vism p.146)、五蓋の捨離が初禪へ入る条件と考えられていたことが分かる (cf. Vibh pp.256-257, Vism pp.139-141 etc.)。しかし、五蓋の捨離のみで次のステップである初禪に入れるのであれば、その上さらに五蓋から心を浄化するのは何故なのであろうか。

五蓋の浄化に関してまず留意すべきことは、五蓋の捨離が在家者にも可能なのに対し、浄化が出家者の「五蓋の除去」のみでしか用いられない点である。捨離と並んで浄化が用いられることは、それが在家者の修養とは別の性格のものであることを示していると考えられる。次に、有学と無学

にとつての五蓋の区別を考慮すると、在家者のままで五蓋の捨離は可能であっても根絶にまでは至らず、解脱を達成するためには五蓋を捨離するだけでは不十分であることが分かる。したがって、五蓋の浄化は出家者が解脱するために不可欠な要素として、初禪から第四禪に達し、「三明」を通じて解脱し阿羅漢となることと深く関わっていると見えよう。しかし、五蓋の浄化の用例は「五蓋の除去」に限られているため、浄化の意図についてはいくつかの可能性が指摘され得るに留まる。<sup>20)</sup>

以上のように、五蓋の検討を通じて修行道における「五蓋の除去」を考察すると、五蓋の項目は「五蓋の除去」以前と (cf. 2-1)、五蓋の捨離と浄化はそれ以降の修養と関わっており、「五蓋の除去」が修行道の前半と後半を絶妙に結びつける役割を果たしていることが分かるのである。

## 結論

これまでの検討をふまえ、修行道における「五蓋の除去」の位置付けをまとめてみよう。修行道は、「四禪」→「三明」という釈尊の成道伝承と共通する後半部分と、「戒蘊」などの前半の様々な修行項目を、「五蓋の除去」が構成・内容の両面で接続する形で成り立っている。五蓋を捨離することは人間が常人以上の境涯、即ち預流の段階に達することを意味し、本検討を通じて、修行道が出家者の宗教的境涯を高めていく修道ルートでもあるという見地が提示されることになる。

修行道における「五蓋の除去」は五蓋の捨離と浄化の2つの要素からなる。出家者は五蓋の捨離によって初禪に入ることが可能となる。五蓋の浄化は解脱に達するために不可欠な要素と考えられるものの、浄化自体の意図は本検討からは明らかにならなかったため、今後の検討課題としたい。

## 参考文献

- 榎本 [1982] 榎本文雄 「初期仏教における三明の展開」『仏教研究』第12号, 1982年12月, pp.63-81.
- 榎本 [2009] 榎本文雄 「「四聖諦」の原意とインド仏教における「聖」」『印度哲学仏教学』第24号, 2009年, pp.354-336. (1-19.)
- 河崎 [2006] 河崎豊 「saddharma という複合語について」『待兼山論叢 哲学篇』第40号, 2006年12月, pp.1-15.
- 阪本(後藤) [2006] 阪本(後藤)純子 「Pāli thīnamiddha-「潛沈・睡眠」、Amg. thīṇagiddhi-/thīṇaddhi- と Vedic mardh/mṛdh」『印度学仏教学研究』第54巻第2号, 2006年3月, pp.901-895.
- 杉本 [1999] 杉本卓洲 『五戒の周辺 — インド的生のダイナミズム —』平楽寺書店, 1999年.
- 馬場 [2008] 馬場紀寿 『上座部仏教の思想形成 — ブッダからブッダゴースアへ —』春秋社, 2008年.
- 林 [2010] 林隆嗣 「アバヤギリ派の色法と睡眠色」『仏教学』第52号, 2010年12月, pp. (19-41.)
- 平川 [1993] 平川彰 『二百五十戒の研究 I』平川彰著作選集第14巻 春秋社, 1993年.
- 平川 [2000] 平川彰 『原始仏教の教団組織 I』平川彰著作選集第11巻 春秋社, 2000年.
- 舟橋 [1952] 舟橋一哉 『原始仏教思想の研究 — 縁起の構造と実践 —』法蔵館, 1952年.
- 古川 [2008] 古川洋平 「初期仏教における 修行道の発展」『創価大学大学院紀要』第30号, 2008年12月, pp.385-413.
- 北條 [1981] 北條賢三 「十善業の源流とその展開」『大乘仏教から密教へ 勝又俊教博士古希記念論集』春秋社, 1981年, pp.67-84.
- 松田 [2006] 松田和信 「梵文長阿含の Tridaṇḍi-sūtra について」『印度学仏教学研究』第54巻第2号, 2006年3月, pp.984-977. (129-136.)
- 刘 [2010] 刘震 『dhyāni tapas ca 禅定与苦修 关于佛传原初梵本的发现和研究』上海古籍, 2010.
- Franke[1913] Otto Franke, *Dīghanikāya -das Buch der Langen Texte des Buddhistischen Kanons-*, Göttingen, 1913.
- Gethin[2004] Gethin, R. M. L, "On the Practice of Buddhist Meditation According to the Pāli Nikāyas and Exegetical Sources", *Buddhismus in Geschichte und Gegenwart*, 10, 2004, pp.199-221.

- Schmithausen[1981] Schmithausen, Lambert, “On Some Aspects of Descriptions or Theories of ‘Liberating Insight’ and ‘Enlightenment’ in Early Buddhism”, *Studien zum Jainismus und Buddhismus, Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf*, 1981, pp.199-250.
- Vetter[1988] Vetter, Tilmann, *The Ideas and Meditative Practices of Early Buddhism*, Leiden/ New York, E. J. Brill, 1988.

## 注

- 1) パーリ語の文献は Pali Text Society (PTS) 版を用い、適宜ビルマ版・スリランカ版を参照した。略号は A *Critical Pāli Dictionary* (CPD) の Epilegomena に従う。また、『大正新修大藏經』は「T」と略し、*The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu* [edited by Raniero Gnoli, 2vols, 1977-1978.] は「SBV」と略す。
- 2) 修行道には「三明」に代わって「六神通」や「漏尽知」を修める場合もあるが、本論では「四禪」の後に修める項目を「三明」で代表させることとする。
- 3) 初期仏教における五蓋について総合的に整理したものは本邦に見られない。「五蓋の除去」→「四禪」については Gethin [2004]などで論じられているが、五蓋そのものに焦点を当てたものではない。
- 4) MN I, p.181 etc., 『中阿含』「五蓋心穢慧羸」(T1.657c21-22 etc.) , SBV II, p.242 etc. その他五蓋はニカーヤにおいて、心に寄生する (cetaso ajjhārūha)、諸欲の対象 (kāma) よりも悪い (pāṭiṭṭhata) 、暗闇のもと (andhakarāṇa)、眼なきことのもと (acakkhukarāṇa)、智なきことのもと (aññānakarāṇa)、智慧の停止 (paññānirodha)、心に寄生する (cetaso ajjhārūha)、痛めつけるものに属する (vighātapakkhiya)、涅槃に作用することのない (anibbānasamvattanika)、不善の集まりをもつ (akusalarāsin) 等と形容される。
- 5) 註釈は nīvaraṇa を「心を蓋うもの」と説明する (Sv p.1027 etc.)。ニカーヤで具体的に nīvaraṇa として提示されるものは五蓋に限らない。輪廻の原因としての無明蓋 (avijjānīvaraṇa) が生きもの (satta) を蓋う例が見られるし (MN I, p.294 etc. cf. Sn 1032-1033)、MN 54 では殺生・不与取・妄語・両舌・貪りと貪欲・謗りと怒り・憤りと苛立ち・慢心の8つを束縛 (saṃyojana) かつ nīvaraṇa とし、これらによって死後に悪趣が予期されるとする (MN I, pp.361-363, cf. Ps III, p.40)。また、cf. DN II, pp.242-243 (Sv p.665) の偈
- 6) ニカーヤ以後の文献は vicikicchā が四向四果中の預流の段階で断たれ、五蓋全てが断たれるのは成阿羅漢の際であると解釈している (Paṭis I, pp.72-73,

- Vism p.685, Sv p.1027, Pj I, pp.25-26, It-a II, pp.182-183)。これらは五蓋の各項目が各々別個に克服されるという立場であり、ニカーヤの立場とは異なる。
- 7) 論蔵の註釈は *kāmacchanda* を *karmadhāraya* に解釈するが (As p.370)、この語はニカーヤで単独、または他の *kāma* を前語とする複合語と一緒に、*kāmesu* と共に列挙されるから (DN II, p.51, MN I, p.241 etc.)、*locative tatpuruṣa* の複合語であると理解する (後に検討する *kāmarāga* も同様)。これについては河崎 [2006] も参照のこと。
- 8) 韻文で5項目を列挙する場合、*uddhacca* のみで、*kukkucca* を挙げない (Th 74, 1010, AN V, p.16 (= Th 74))。ただし cf. Sn 1106-1107
- 9) 『俱舍論』は *āhāra* (糧) が共通であることを根拠として、第3, 第4項目をそれぞれ一まとまりのものと説明している。(Abhidharmakośa-bhāṣyam of Vasubandhu [ed. by Pradhan, Patna, 1975.] pp.318-319.)
- 10) *Vibh* は第3項目の *middha* を身体的な病と解釈する一方で (*Vibh* pp.253-254)、それよりも後世に成立した *Sv* は *middha* を心所の病 (*Sv* p.211)、あるいは五蘊のうちの三蘊の病とする (*Sv* p.1027)。*middha* を心的と身体的どちらの領域に含めるのかの議論については林 [2010] を参照のこと。
- 11) *SBV* や 刘 [2010] では *vyāpāda* のみである。(SBV II, p.241, 刘 [2010] p.118)
- 12) cf. *Encyclopaedia of Buddhism* [published by Government of Sri Lanka] s.v. *nīvaraṇa*, Franke [1913] p.72 n3. 説一切有部系統の *Dirghāgama* 中に見られる「五蓋の除去」も同様 (SBV II, p.241 (cf. 松田 [2006]), 刘 [2010] pp.117-118, 227)。法蔵部所伝の漢訳『長阿含』も訳語を変えている事からすると、同様の使い分けをしている可能性がある (「貪欲蓋」(T1.51b9, 53c6)、「慳貪心」(T1.85a21))。「五蓋の除去」の定型句以外の *abhijjhā* 等の五蓋の用例は以下の通り MN I, pp.17-18, 463-464, AN II, pp.14-15, 66-67, V, pp.92-93, 94-95, p.104, 163, It pp.118-120.
- 13) 修行道中、出家者は「戒蘊」後の「感官の防護」で、*abhijjhādomanassa* (欲しがりと憂い) といった諸の不善法が漏れ込む (<anu-ā√sru> ことのないように防護する。従って「五蓋の除去」中の *abhijjhā* は「感官の防護」との関連の中で用いられるという理解も可能だが、後に用例を提示するように「感官の防護」が修められない場合でも *abhijjhā* 等が捨離されている。
- 14) 註釈も同様に解釈する (Ps I, p.189)。この点は十善業道の最後の正見と十無学法の最初の正見が同一視されていることから確かめられる。その他、*Vism* は戒の解説の際、「戒蘊」の不殺生等を十善業道の冒頭7項目、残りの3項目を「五蓋の除去」として提示し (*Vism* p.7)、DN 2の相当漢訳である『寂志果経』では、「戒蘊」中で十善業道と五蓋が十善業道の中に五蓋が挟みこま

れる形で一緒に言及されている。(T1.272c-273a)

- 15) *katamā ca gahapati paññāsampadā? abhijjhāvisamalobhābhūtena cetasā gahapati viharanto akiccaṃ karoti kiccaṃ aparādheti.<sup>1</sup> akiccaṃ karonto kiccaṃ aparādhento yasā ca sukhā ca dhamṣati, vyāpādābhūtena cetasā …… thīnamiddhābhūtena …… uddhaccakukkuccābhūtena …… vicikicchābhūtena …… dhamseti. sa kho so gahapati ariyasāvako abhijjhāvisamalobho cittassa upakkilesa ti iti veditvā abhijjhāvisamalobhaṃ cittassa upakkilesaṃ pajahati, vyāpādo cittassa …… pajahati, yato ca kho gahapati ariyasāvakassa<sup>2</sup> abhijjhāvisamalobho cittassa upakkilesa ti iti veditvā abhijjhāvisamalobho cittassa upakkilesa pahīno hoti, vyāpādo …… pahīno hoti, ayaṃ vuccati ariyasāvako mahāpañño puthupañño āpāthadaso paññāsampanno. ayaṃ vuccati gahapati paññāsampadā, (AN II, pp.66<sup>36</sup>-67<sup>22</sup>)*
- \* 1: PTS 版にはないがスリランカ版に従いピリオドを入れる。\* 2: PTS 版は -sāvako。スリランカ版は -sāvakassa。MN I, p.37 のパラレル箇所を参照すると、genitive の方が解釈しやすい。-ko を -kassa と改める。
- 16) *kathañ ca bhikkhave yā 'yaṃ dīṭṭhi ariyā niyyānikā niyyāti takkarassa sammādukkhakkhayāya: idha bhikkhave bhikkhu araññagato vā rukkhamūlagato vā suññāgāragato vā iti paṭisañcikkhati: atthi nu kho me taṃ pariyuṭṭhānaṃ ajjhataṃ appahīnaṃ yenāhaṃ pariyuṭṭhānena pariyuṭṭhitacitto yathābhūtaṃ na jāneyyaṃ na passeyyaṃ ti, sace bhikkhave bhikkhu kāmarāgapariyuṭṭhito hoti pariyuṭṭhitacitto va hoti, …… byāpādapariyuṭṭhito …… thīnamiddhapariyuṭṭhito …… uddhaccakukkuccapariyuṭṭhito …… vicikicchāpariyuṭṭhito …… pariyuṭṭhitacitto va hoti, so evaṃ pajānāti: na 'tthi kho me taṃ pariyuṭṭhānaṃ ajjhataṃ appahīnaṃ yenāhaṃ pariyuṭṭhānena pariyuṭṭhitacitto yathābhūtaṃ na jāneyyaṃ na passeyyaṃ, suppañhitaṃ me mānasaṃ saccānaṃ bodhāyā ti, idam assa paṭhamāṃ nānaṃ adhigataṃ hoti ariyaṃ lokuttaraṃ asādhāraṇaṃ puthujjanehi. (MN I, p.323<sup>3,24</sup>)*
- 17) MN I, p.323, III, p.14, SN V, pp.121-126, 126-128, AN III, pp.230-236, 317-319, 320-322, V, pp. 323-324.
- 18) 釈尊の成道伝承や初転法輪の直前の五比丘との問答の例 (MN 26, 36, 85, 100, Vin I, pp.9-10 etc.)。その他、四禪や四無量心とも関わる例。(MN 31, 65, 99, 128 etc.)
- 19) この他、uttarimanussadhamma は「上人法」として妄語戒の検討の際に言及されている。cf. 平川 [1993] pp.314-329, 杉本 [1999] pp.217-249
- 20) 現時点では①註釈の解釈を重視し、五蓋の浄化 = 五蓋の不再発とする理解、

②五蓋の捨離が初禪に至る条件とされる点、修行道では初禪の直前に *pahāya* とあって浄化には言及していない点を重視し、「四禪」以降で五蓋が浄化されているという理解、③捨離と浄化は同じことを違う表現で述べているに過ぎないとする理解、の3つがある。しかし①の立場では成阿羅漢の時点で五蓋が根絶される立場との齟齬が問題となり、②は修行道を段階的なものとする理解と矛盾し、③の立場では浄化する意味そのものが疑問視される。いずれの理解も根拠に乏しく、現時点で各々を積極的に主張する用例は見出せていない。

五蓋を捨離せずとも禪 (*jhāna*) を修めることは可能であるが、四禪を修めることは出来ない (cf. MN III, pp.13-14, AN V, pp.323-324)。このことは初禪に至ることが解脱に通じていることを示唆するが (cf. AN III, p.354, Sn 66-67, 1106-1107)、一方で五蓋の捨離を初禪の達成の条件に限定する理解も可能である (cf. MN I, pp.463-464, Ps III, p.181)。五蓋は初禪だけでなく三明冒頭の心状態 (= 第四禪に達した出家者の心状態。DN I, p.76 etc. cf. Sv p.219, Ps I, p.126, Vism p.377) と関わっていると考えられ (cf. SN V, p.92, AN III, p.16. さらに cf. DN I, p.110)、その場合は五蓋の浄化が初禪を含めた「四禪」以降の修養と関わるという理解を可能にする。

(大学院博士後期課程学生)



## SUMMARY

**Abandoning Five Hindrances**

Yohei FURUKAWA

In this paper, I discuss characteristics of five hindrances (*pañca nīvaraṇā/-āni*) in Pali canon, which has not been focused in the past study. They are grouped into three points. First, besides desire for the objects of sensual pleasure (*kāmacchanda*), covetousness (*abhiḥjhā*) or passion for the objects of sensual pleasure (*kāmarāga*) is also used as the first item in the list of five hindrances. Second, among them, five hindrances with *abhiḥjhā* as the first item relates to ten ways of bad acting (*dasa akusalā kammaṭṭhā*), and five hindrances with *kāmarāga* as the first item emphasizes that it has an aspect of impeding understanding and seeing as it really is (*yathābhūtañāṇadassana*). Third, abandoning five hindrances means entering upon the stream (*sotāpatti*) in stages of training. Through the above investigation, it is confirmed that the *arahat* formula (in DN 2 etc.) is for a *bhikkhu* to step up the stages of training for his liberation (*vimokkha*).

In the *arahat* formula, abandoning five hindrances is a requirement for coming up to the first *jhāna*. On the other hand, a *bhikkhu* must clean his mind from five hindrances in order to reach his aim liberation.